機械の内丸最一郎

佐藤邦夫

山村の小さな小学校でも図書室があるように、会社・工場・事業所にも図書室を設けているところが多いようです。

嘗て筆者が勤務した工場にも小さな図書室がありました。しかし、会社の都合でよく移転をする図書室でした。（工場では生産活動が最優先なので、いたし方ありません。図書室がレイアウト変更の邪魔になると引越しするのです。引越しをするたびに狭くなっていきました。）

昭和四十年代はまだのんびりしていたようです。仕事に必要な専門書・雑誌（工学誌など）や自社の研究報告書（論文）類のほかに、文芸関係の本もかなりの冊数を収蔵していました。本が好きな従業員のために買ってくれていたのでした。十数年前のことですが、どんな本があるのかな？と棚を見廻っていたら、なんと小林惟司著『寺田寅彦の生涯』（東京図書）初版と太田文平著『中谷宇吉郎の生涯』（学生社）の初版を見つけ、驚きました。あるとは思ってなかったからです。

工場の図書室を維持・管理しているのは庶務課でした。購入図書は、技術系の本・文献関係は従業員の要請があれば、予算内で即購入と決めていたはずです。文芸関係は？たぶん庶務課の主任あたりが周りの従業員の意見なども聞きながら、購入を決めていたのだと思われます。『寺田寅彦の生涯』初版は一九七八年の出版でしたので、当時の庶務課主任は誰だったのだろうか？と気になりました（寅彦や宇吉郎を知る人だったのでしょうね）。

私の世代では寅彦や宇吉郎を知る者はごく少ないのですが、十歳上の上司（部長）は筆者が『寺田寅彦画集』を持っていることを知ると「俺に見せろ」と命令口調で言いました。また、別の上司（副工場長）は、筆者が工場新聞に『寅彦と宇吉郎』と題して駄文を書いたところ、「俺が学生の頃はみんな寅彦や宇吉郎を読んだものだよ」と言って来ました。したがって昭和一けた生まれで大学まで学ばれた方々に寅彦や宇吉郎を知る人が多いように思われます。

また、図書室にあった工学専門書の中には内丸最一郎の著書もありました。あの『寺田寅彦の生涯』に寅彦と最一郎のことが書いてあります。

漱石が他人の家を訪ねることは稀であったが、明治四十四年六月二十八日には（中略）夜八時半頃、本郷五丁目の寺田の宿を訪ねている。（中略）ちょうどこの頃、精養軒で久しぶりに木下季吉・田丸卓郎・石崎所長・内丸最一郎・野並専売局技師・寺田が漱石と落ち合った。

食後、懐旧談にふけった。木下季吉は漱石が病気の時、見舞おうと思ったが、昔叱られたことを思い出して行く気がし

なかったと言った。五高時代には、寅彦が英語の答案を提出するときだけ、漱石はニコニコして受けとった。あんな不愉快なことはなかったと内丸最一郎は言う。

ここに集まった人たちの中では内丸最一郎が一番長生きをした。彼は日本機械学会の長老として「機械の内丸」と言われたが、昭和四十四年四月横須賀市大楠町の自邸で脳卒中のため死んだ。九十二歳であった。

内丸最一郎といえば、矢島祐利が筆者に次のように言ったことが思い出される。

「機械の大家の内丸最一郎は［寺田は頭がいいとみんな言うが、機械のことでも考えているのかネ］と批評されておった。（中略）機械に没頭している内丸先生の耳にも、寺田先生の頭の良さが聞こえていたのは、寅彦の名声がただものじゃなかったことを示すエピソードだ。」

内丸最一郎は寅彦とともに三年生のとき特待生となっている。「学力優等品行端正課業精励なる生徒を撰抜し特待生となす。」とある。　（傍点筆者）

寅彦と最一郎は五高で同級生だったのです。ともに特待生になるほど優秀でした。

この内丸最一郎と、筆者が勤務した工場とに関係があったことが分かりました。八歳年上の先輩が「昔、内丸先生が…」と話し出したからです。ええ？！と思いました。

聴いてみると、昭和四十年頃まで工場の若手技術者の教育のために講師を招聘していたらしいのですが、その講師が東大名誉教授の内丸最一郎だったのでした。

民間企業の一工場なのに〝寅彦〟級の超一流の先生を招いていたとは！なんとも豪勢な話だと思います。また驚いてしまいました。

内丸先生のご自宅が横須賀市なら、清水市まで東海道本線を電車でやってくると約三時間はかかったはずです。八十歳過ぎまで講師を続けられたとは頭が下がります。

「内丸先生はご高齢だった。構内を散歩される際には庶務課の女性がいつも付き添っていた。」「内丸先生にご相談に行くと、持っていった機械の部品を手に取ってジィ～と穴が開くほどに見るんだ。それを作った技術を先生の眼力で見抜かれる気がしたよ。」という先輩の話でした。

筆者が入社したのは昭和四十二年で、残念ながら内丸先生にはお目に掛かれませんでした。それでも工場には技術を大事にする社風・伝統は続いていて研究発表会が年三回開催されています。きっと内丸先生のおかげなのでしょう。

〈付記〉内丸最一郎は東大退官後、日立製作所の技術顧問を七十歳まで務めたのでした。この縁があったので、その後も工場へ指導に出向かれたようです。

なお、筆者は旧・日立製作所清水工場ギネスの研究報告書最多発行記録を持っていました（三十五です）。非研究専門職でしたので多いと思います。寅彦先生を真似たのです。

（二〇一一・四・四）